国立国語研究所学術情報リポジトリ

［講演1］ 漢文訓読を学ぶということ

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2020-03-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 渡辺, さゆり メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002651

講演１　漢文訓読を学ぶということ

渡辺 さゆり

私は今日、札幌から富山に久しぶりに来ました。とても暑いですね。小助川先生からもご紹介がありましたとおり、私はこの大学の卒業生で、1993 年に社会人として編入学しています。教養学部があった最後の年の 10 月のことで、その時から富山大学とのご縁がはじまりました。

富山大学人文学部語学文学科国語国文学に編入したのですが、社会人入学ですのでそこそこの年齢でしたが、当時、社会人の学生は私だけではなく、人文学部に何人かおり、特に違和感を覚えることなく若い人たちと一緒に勉強したという思い出があります。

この大学に入学した当初の目的は国語の教員免許取得でした。今、私は札幌大学の教員ですので、中学校・高校の教員への道はもろくも崩れ去ってしまったのですが、当時は教員免許を取りたくて富山大学に入学したのです。

実は 1993 年 10 月というのがポイントで、この時、富山大学に小助川先生が赴任されました。小助川先生が富山大学に赴任された年と私が編入した年がたまたま同じであったことが、これからお話しする「漢文訓読を学ぶということ」というタイトルのスタートになります。

私は富山大学へ社会人入学をしたと言いましたが、では、現役の学生時代は何を専攻していたかというと、やはり同じように国文学科の学生でしたが、卒論は近世の本居春庭『詞通路』がテーマでした。ですから当時は訓点語学とは無縁だったのです。1993 年の富山大学への編入と小助川先生の赴任が一致したことが、私にとって「漢文訓読を学ぶということ」に直接つながるきっかけになりました。

１　訓点語学との出会い

訓点語学との出会いは、1993 年 10 月 14 日でした。当時の授業ノートがありまして、見てみるとこの日付が書いてありました。今は授業名が変わっているかもしれませんが、小助川先生の「国語学演習」という授業でした。

10 月 14 日の授業ノートにどのような内容が書いてあったのか、私のノートに沿ってそのまま述べることとします。

まず、「＜訓点資料の研究＞　漢文の訓読　どうして訓読ができるのか？　外国語が分かるのか？」です。私はもともと近世の春庭を読んでいましたので、漢文訓読や訓点資料には縁がありませんでした。富山大学に入学し、小助川先生の「国語学演習」を履修し、初回の授業の冒頭がこの内容だったのです。私にとっては衝撃的な出会いだったことを覚えています。小助川先生の授業を受講している方はお分かりかと思いますが、「『上野本漢書楊雄伝天暦二年』の訓読」という内容でこの授業が始まりました。当時の授業ノートには

「漢籍と注釈書の関係を示唆」とのメモが残っており、ここから、私の訓点語学との関係がスタートしたということになります。

初回の授業の「『上野本漢書楊雄伝天暦二年』の訓読」に関連して、この授業は演習でしたので、学生が一人ずつあるテーマについて調べて発表することになり、七つのテーマが提示されました。その内容は、まず「覆製本の解題（神田喜一郎氏）」を読み下すことでした。楊雄伝の京都大学影印本の解題を読み下すということで、真っさらなプリントが配られました（図 1）。結局、一人ではなく受講生全員で読み下すことになりましたが、私はそれまで漢文というのは高校の国語の授業で習った程度でした。今でもそうではないでしょうか？その程度の知識しかなかったので、このプリントをぱっと渡されたときに「えっ、これを読むの？」とちょっとどきどきしました。それでもやらなければいけないと頑張って、漢和辞書と格闘しながら読んだ記憶があります。

「覆製本の解題を読む」
京都帝国大学文学部景印旧鈔本第二集
『漢書楊雄伝』解題（神田喜一郎氏）

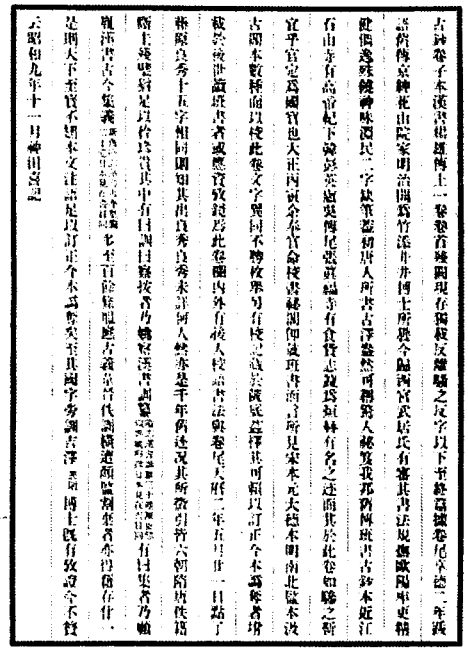

図 1

句読点のない白文を、辞書で意味を調べながら、どこで区切るのか・・などを考えながら読んでいったというのが最初です。結果、その白いプリントがメモ書きや句読点代わりの線などで、随分汚くなりました。私だけではなく、ほかのメンバーも頑張っていましたね。

この白文を読むということが、高校の教科書で漢文を勉強した以外で漢文訓読と出会っ

た最初ということになります。本当に大変だったと記憶しています。恐らく小助川先生の思惑では、1回か2回の授業で解題をすべて読み下すというスケジュールを立てられていたと思うのですが、実際は1回の授業で1行進むか進まないかというようなレベルでした。ですから、個人発表というレベルには達しませんでしたが、みんなでとにかくやろうという感じでしたね。

「国語学演習」で提示された七つのテーマのうち、1番目が「テキストの二重性」、3番目が「文選読との関係」、4番目が「覆製本の価値と限界（角筆）」でした。その後、5、6、7と続くのですが、訓点語学初心者の学生がこのようなテーマで訓点語学とつながりを持っていきました。

「テキストの二重性」についてですが、『漢書楊雄伝』の中に『文選』の「甘泉賦」「校猟賦」と重複する箇所があるという内容の授業を受けました。そこで私は『文選』という資料と出会うことになります。「『文選』とは何なのだろう」というところから始まったのですが、『文選』は梁の昭明太子のアンソロジー（詞華集）で「集書」ですね、従って「史書」と『文選』とは別テキストとして扱わなければいけない、つまり『漢書楊雄伝』という「史書」を読むときに『文選』は持ち込まないということを学んだ記憶があります。

3番目のテーマ「文選読みとの関係」では、築島裕先生『平安時代の漢文訓読語につきての研究』の中の「文選読」を授業で読みました。「文選読」については私が発表したので、少し思い入れのあるテーマになりました。

その次のテーマが4番目の「覆製本の価値と限界（角筆）」です。訓点資料の中に、白点でも朱点でも墨点でもない、視覚に訴えない点を書くという角筆についてでした。最初は「割り箸を鉛筆削りで削った状態にして紙に書くとくぼみができますね。その状態で文字を書くのです」というような学びで、興味を抱いたテーマでした。

角筆については非常に幸運なことに、1995年、私が4年のときに、角筆文献調査に参加することができました。これはどこかよそに行くという調査ではなくて、小林芳規先生が富山県に角筆文献調査にいらっしゃった際に、調査に参加できたということです。小助川先生と当時大学院生だった女性の方と私と3人で、呉羽にある富山県立図書館に行き、角筆調査に参加させていただきました。これは本当に貴重な経験でした。今から思い出しても「あのときは無我夢中でやっていたけど、楽しかったな」という記憶があります。

角筆調査は、富山大学付属図書館でも行いました。これは当時、小助川先生の演習を履修していた学生の何人かと、すぐそこにある図書館の3階だったと思うのですが、まだ整理されていない本が置いてある部屋がありまして、そこで授業の一環として角筆調査を行ったのです。今となってはびっくりされるかもしれませんが、当時は角筆調査用のライトもないときでしたので、窓のそばに行って本を光にかざし、角筆があるかどうか見ていたのです。これらの調査では実際に角筆文献を発見することができました。1995年の『角筆文献目録』に、角筆文献を発見した当時の学生名、文献名などが記載されています。

5〜7番目のテーマは「声点の機能」「訓読における注釈書と字書との関係」「訓読の方法」です。これらのテーマは、その後、小助川先生のさまざまな授業や演習でのテーマとなり

ました。「声点の機能」では声点資料を実際に見て調査を行いましたし、「訓読における注釈書と字書との関係」については、『楊雄伝』は中国の注釈書と、あるいは古字書の『玉篇』『切韻』と関係があるという学びを受けました。さらに「訓読の方法」では、漢籍の学習方法、つまり「漢籍の学習は、中国側注釈書を典拠として行われた」ということについて徹底的に学びました。

このようにして私は漢籍訓点資料、そして訓点資料としての『文選』と出会いました。この富山大学で小助川先生の「国語学演習」に参加し、訓点語学と出会ったことになります。

その後、私はこの『文選』という訓点資料を扱うことが非常に多くなりました。『文選』は中国の梁の昭明太子（蕭統）が編纂した本で、編纂年代が 530 年といわれている非常に古いものです。これが古く日本に伝わってきて、日本でも愛読されていたのではないかといわれています。実際に、『文選』『爾雅』『史記』『漢書』『後漢書』は当時の大学寮でも教科書として採用されたとのことです。『文選』は訓点資料も現存していますので、実際に日本人が勉強していた文献ということになりますね。

2　訓点資料としての『文選』

富山大学では『文選』の訓点資料として二つの文献に出会いました。一つ目は『文選集注』巻八と巻九です。「三都賦序」「蜀都賦」を中心とした巻八と、巻九には「呉都賦」が収録されています。もう一つは、「宮内庁書陵部蔵『文選』巻第二院政期点」というものです。

『文選集注』は影印本を使って研究を行いました。『文選集注』の本文に加点された声点の字音体系調査を行い、典拠を推察するという内容でした。「宮内庁書陵部蔵『文選』巻第二院政期点」はマイクロフィルムによる調査を行った後、原本調査を行いました。平成 8 年（1996 年）ですから先ほどの角筆文献調査の 1 年後で、11 月 19 日から 21 日が調査日です。この調査では宮内庁書陵部蔵へ出張しました。小助川先生に随行したわけで、初めて参加した原本調査でした。宮内庁に 3 日間詰めて原本を見ました。この調査も私の富山大学での一つの大きな経験です。

宮内庁書陵部の『文選』を見ていくと、いろいろな問題点が考えられました。「行間の訓点の典拠は何なのか？」というテーマに直面し、その後、私はその問題に関連する学習、研究を続けてきました。また、書陵部蔵の『文選』は無注本ですから、「加点者はどのようにして学習したのか」というテーマについても学びました。「漢籍の学習は、本文に対して作成された中国側注釈書によって行われた」との考えをベースとして『文選』と中国側注釈書との関係について学び続けたのです。さらにこのテーマに沿って、複数の注釈書が記載されている『文選集注』との関係についても研究しました。

3　具体例

3．1　書陵部本『文選』

ここで、具体的に書陵部本『文選』はどういう本なのかについて、画像を準備しましたのでご覧ください（図2）。無注本ですので、注はなく本文だけです。

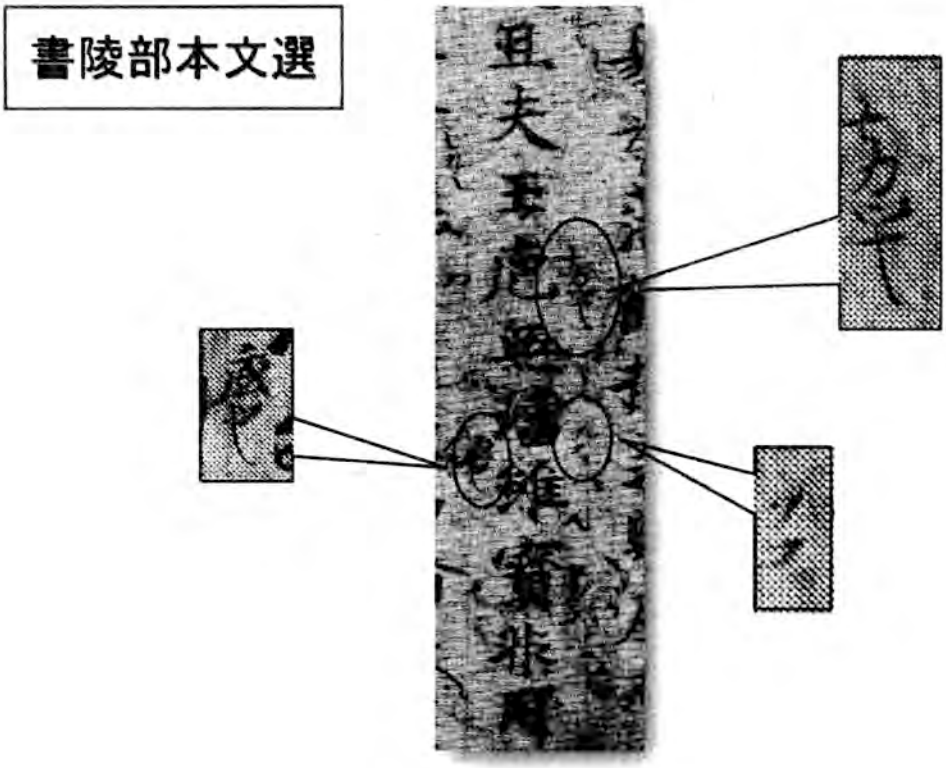

図2

この画像を見ていきますと、やはりいろいろな点を確認することができます。本文の文字に対して片仮名で何か書いてありますね。少し大きくしてみると、片仮名で「サカツキ」と書かれています。濁点のない時代ですので、声に出して読むと「サカヅキ」ですけれども、ここでは「サカツキ」と書いてあります。ほかには、これは画像が粗くて拡大してもなかなか読みづらいのですが、「ソコ」というような読みが片仮名で書かれています。片仮名だけではなくて、左の方を見ると漢字が二つ書いてあります。これは「底也」ですね。この画像はほんの一部分ですが、書陵部本『文選』では、このような訓点が確認できます。

3．2　『文選集注』

これらの訓点がどうしてこのように加点されたのかを考えるときに、『文選集注』がポイントとなるのではないかということで、『文選集注』の同じ本文の箇所を比較してみます（図3）。「當」など書陵部本とは字体が少し違いますが、同じ箇所です。『文選集注』には中国

側注釈書、つまり中国で作られた『文選』の注釈書が記載されています。この画像には綦毋邃、李善、文選音決、呂向などの注が記載されています。「集注」とは注が集まったという意味です。

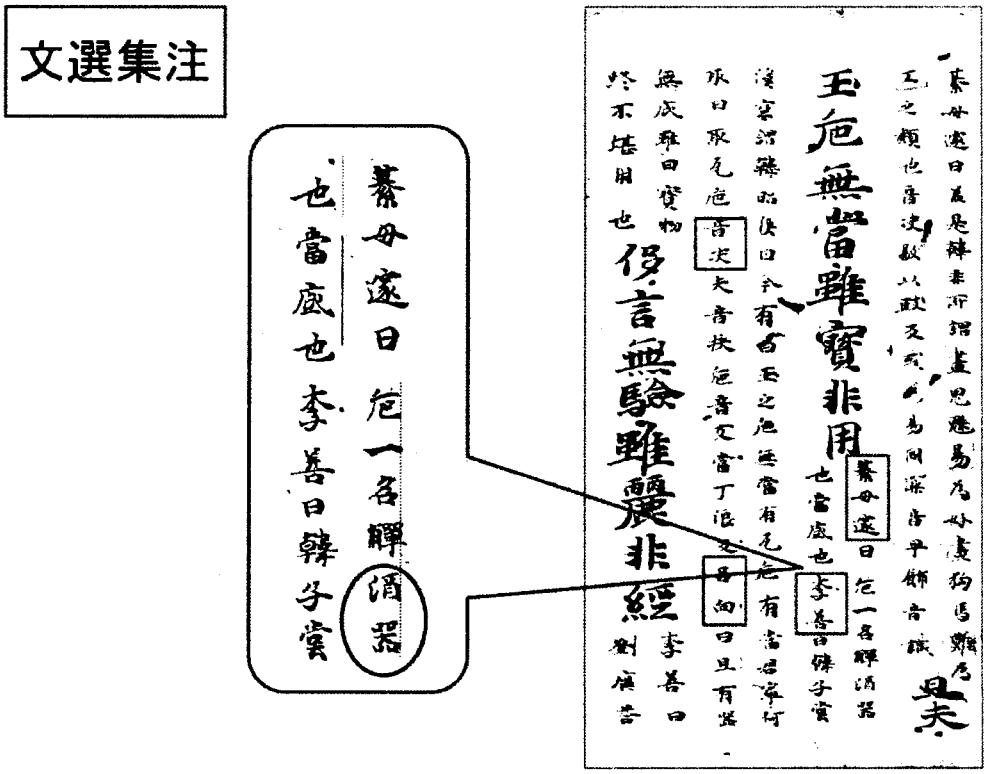

図 3

これをさらに細かく見ていきます。私も中国語は全く分かりませんが、でも、構文を覚えるとそんなに恐れるものでもありません。まず、綦毋邃の注を見てみます。この字（「巵」）をよく見てみると、本文の中に同じ文字があります。この赤線で引いたところは、綦毋邃が「巵」に対して説明を加えている場所です。読んでみると、「「巵」またの名を「觶」」とあります。つまり「巵」と「觶」は意味としてイコールです。その意味は何かというと「酒器也」、つまりお酒の器です。お酒の器ということは「サカヅキ」ですね。つまり「巵」は「サカヅキ」という意味を持つことになります。このように見ていくと、この注と先ほどの書陵部本の「サカツキ」が関係しているのではないかという考えに辿り着くことができます。

さらに綦毋邃の注のなかに「底也」という注もありますが、ここも先ほどの書陵部本に同じような漢文注がありました。ですから、書陵部本に加点されていた「サカツキ」「ソコ」「底也」という注は、このような中国側で作られた注釈書が典拠となって加点された可能性があるということです。

加点の典拠を探すのも楽しいのですが、次に少し方向性を変えて『文選集注』に記載されている注釈を実際に読んでみましょう。注釈を読むと想像力も広がりますし、意外と面白いことが分かります。

これは李善注の一部で、綦毋邃の注釈に続く箇所です。堂渓公という人が昭候という王様に向かって言った言葉が書かれています（図 4）「白玉」、つまり「宝石でできた、質のいい、杯があります。でも、底がないのです。片や、瓦（素焼きの土器）でできた杯があります。それには底があります。さあ、あなたはどちらを選びますか？」という内容です。

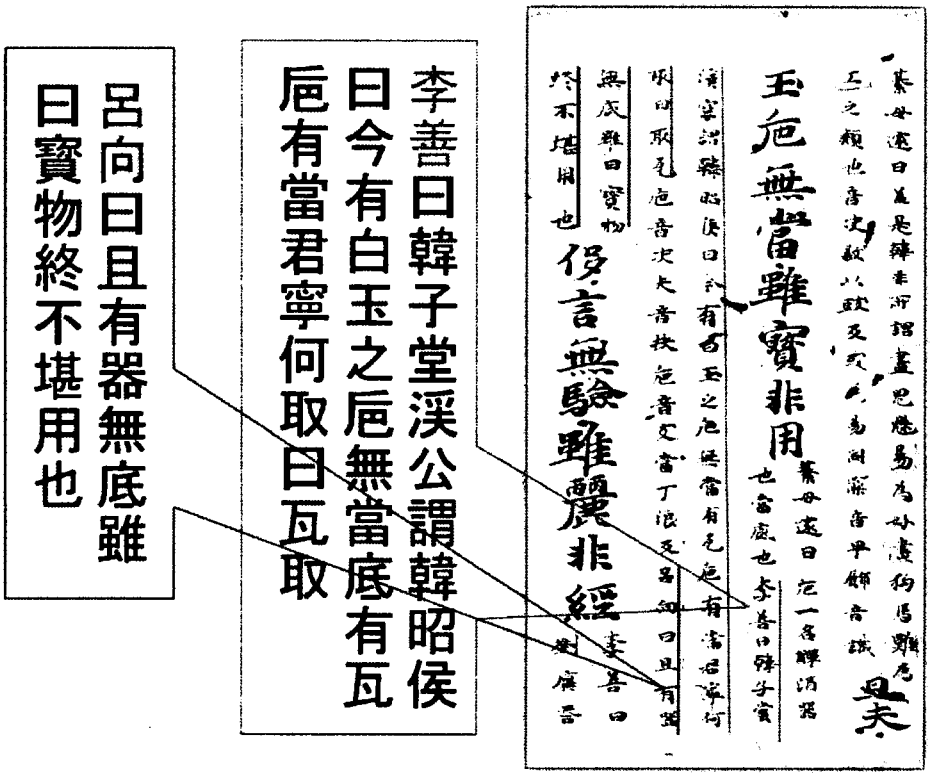

図 4

訓点を加点するときには、「巵」が「サカヅキ」であるということが分かればいいのですが、注釈書を読んでみると、興味ある内容が書かれていることがわかります。

さらにもう一つ、「集注」なので似たような注が複数出てくるのですが、次は五臣注です。五臣の一人である呂向もまた注釈書の中に「器があるよ。でも、底がない。それは宝といっても結局、役に立たないのではないか」と記載しています。質のいい美しい杯に対して「底がない、あなたはどうしますか」と中国の書物の内容が書かれているので、読んでみても、「面白そうなことが書いてあるな。中国の文献にはこういうことが書いてあるのだな」と中国文学に近づいたような気持ちになります。

３．３　『徒然草』

このような予備知識を持って『徒然草』を読んでみました。これは『徒然草』の第三段です（図 5）が、小学館の『新編日本古典文学全集』を参照しました。

『徒然草』

第三段よろづにいみじくとも

よろづにいみじくとも、色好まざらん男は、いとさうざうしく、玉の巵の当なき心地ぞすべき。

露霜にしほたれて、所定めずまどひ歩き、親のいさめ、世のそしりをつつむに心の暇なく、あふさきるさに思ひ乱れ、さるは独り寝がちに、まどろむ夜なきこそをかしけれ。

さりとて、ひたすらたはれたる方にはあらで、女にたやすからず思はれんこそ、あらまほしかるべきわざなれ。

（『新編日本古典文学全集44』（小学館）より）

図 5

有名な個所ですが「よろづにいみじくとも、色好まざらん男は、いとさうざうしく、玉の巵の当（そこ）なき心地ぞすべき」という一文があります。これは兼好法師が理想とする男性についていろいろと書いてあるところです。兼好法師は、光源氏、在原業平などを理想としていたようです。「すべてに素晴らしくても、恋愛の心を解しない男は物足りない」、それを何に例えているかというと「玉の巵の当なき心地ぞすべき」としているのです。

この全集の頭注を見てみると「この個所は『文選』を引用している」と書いてあります。ただ、実際のところ『文選』以外の漢籍の中にもこの個所はあるので、『文選』かどうか分かりませんが、『文選』の内容を知っているのと知らないのでは、知っていた方が『徒然草』をより楽しく読めるのではないかと思います。中国の漢籍の内容を少しでも知っておくと、日本文学である『徒然草』もより楽しく、より興味を持って読めるのではないかという一つの例として、今回挙げてみました。

4　漢文訓読を学ぶということ

最後に本日のテーマである「漢文訓読を学ぶということ」について三つポイントを述べます。

一つ目は「教科書に載らない歴史を学ぶ」です。中国の漢字を日本は文字として受け入れましたが、現在の教科書で漢文を読むという行為は表舞台にそうそう出る歴史ではないような気がします。今の日本の中学校、高校の日本史の教科書で、漢字を読む、漢文を読むという行為が、中古から近代に亘り、根底にあった行為であることは、分かっているようで分かっていないのではないかと思います。いろいろ事情はあるのかもしれませんが、そのような歴史が日本にはあったということを訓点語学は教えてくれます。

二つ目は「漢文を学ぶことは日本文化を学ぶこと」です。今の『徒然草』もそうですが、「日本文学」には何らかの形で中国の文化と関わっているところがあるのではないでしょうか。それは漢文を学ぶ、漢文を読むことから体感できるのではないかと思います。

最後に「日本文化の中に世界が見える」ということです。これは 2 番目の逆で、文学に限定せずに「文化」と言いましたが、「日本文化」の中には中国、韓国、その他諸外国の何らかの影響、関係性を感じ取ることのできる場合もあるます。日本文化の中から逆に世界を見るチャンスも生まれてくるのではないかと思います。

最後になりましたが、訓点語学を志す学生にとって小助川先生のもとで勉強できるということは、本当に恵まれていると思います。また富山という場所は、関東や関西へ調査に行くときも、時間・費用ともに学生でも参加しやすい環境にあると思います。ぜひ学生の皆さんには、小助川先生のご指導のもとで訓点語学を精一杯学んで頂きたいと思います。

少し時間をオーバーしてしまいましたが、私の発表はこれで終わります。ありがとうございました。